原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第２集

百合畑古墳群・山ノ神古墳・壱岐氏居館跡

一般国道382号および県道湯ノ本・芦辺線改良工事
に伴う発掘調査報告書

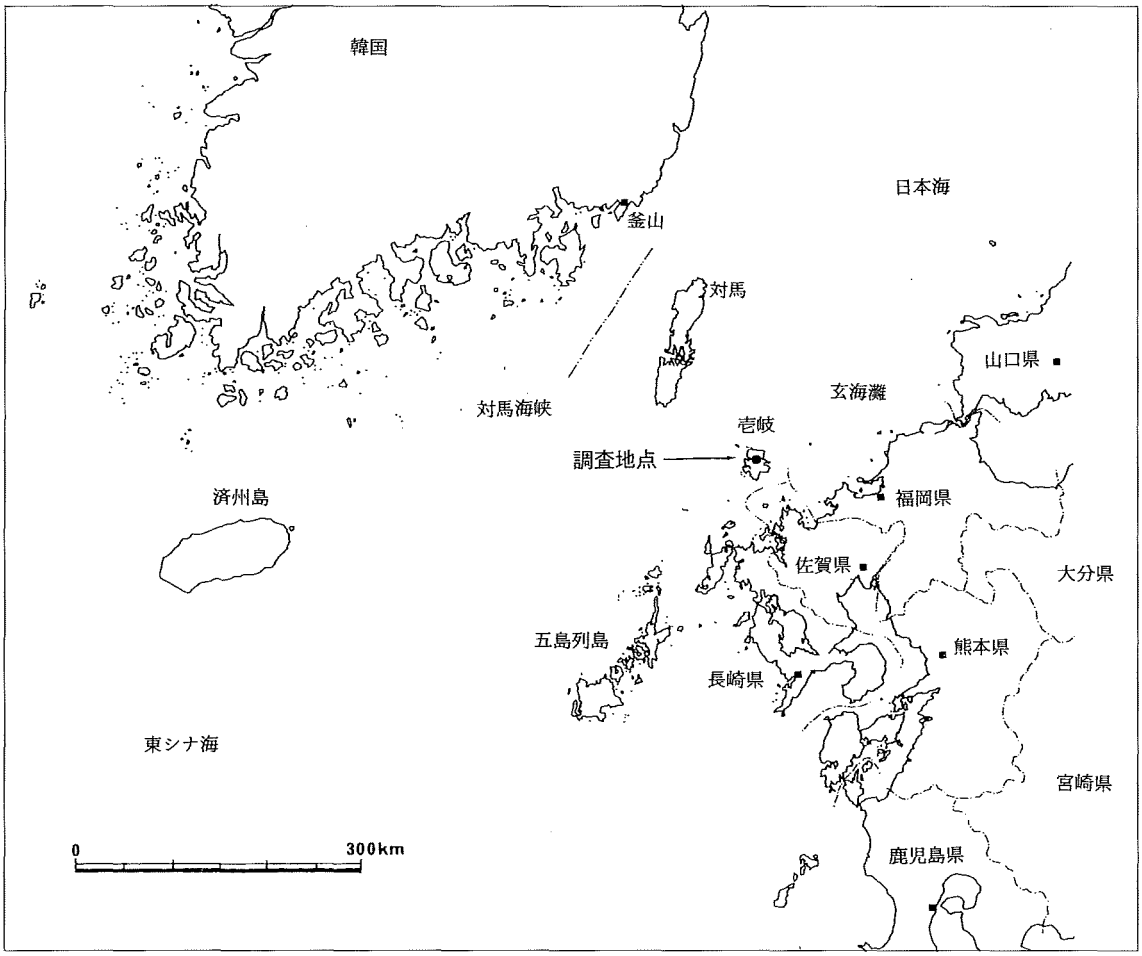
1997

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第２集

百合畑古墳群・山ノ神古墳・壱岐氏居館跡

一般国道382号および県道湯ノ本・芦辺線改良工事
に伴う発掘調査報告書



壱岐島位置図

発刊にあたって

本書は，一般国道382号と県道湯ノ本・芦辺線の改良工事に伴って平成６年度から８年度にかけて実施された百合畑古墳群第１号墳・第16号墳と山ノ神古墳および壱岐氏居館跡の発掘調査報告書です。

いずれも，道路の拡張工事によって遺跡の一部がかかることになり，緊急調査を行ったものです。

壱岐島内には，現在264基の古墳が存在していて，その数は長崎県内にある古墳の半数以上を占めます。県土の3.3％ほどの面積の小さな島に，これほど多くの古墳がどうして存在するのか，どのような理由や要因に基づくものかについては，現在のところまだ結論はでておらず，その解明は今後の課題です。

「温故知新」（古きをたずね，新しきを知る）という言葉がありますが，文化財は先祖の残した遺産であり，現在を写す鏡です。すばらしい遺跡・文化財があることは地域の誇り，将来を担う子供達にとって，郷土への愛着と自信を高めることができます。遺跡は，遠い過去の産物ではなく，私達とともに同じ時代に存在しています。

したがって，遺跡や文化財を護り将来に伝えていくのは，私達の努めであり，地域住民の方々のご理解とご協力をいただきながら，文化財保護担当部局と開発部局との綿密な連絡調整が必要と思われます。

壱岐には，弥生時代の遺跡として全国的に話題を提供している原の辻遺跡やカラカミ遺跡があり，多くの古墳とともに豊かな文化財や歴史をもつ島として今後ますます注目を集めていくことと思います。本書が，学術的資料として活用され，文化財の愛護に役立つことを念じて刊行のあいさつといたします。

平成９年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　中　川　　忠

例　　言

1．本書は，長崎県教育委員会が平成６年度から平成８年度に実施した一般国道382号と県道湯ノ本・芦辺線改良工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。

2．本書に収録した遺跡は以下のとおりである。

①百合畑古墳群第１・16号墳　平成７年度調査　（一般国道３８２号改良工事）

・壱岐郡勝本町百合畑触

②山ノ神古墳　平成８年度調査　（県道湯ノ本・芦辺線改良工事）

・壱岐郡芦辺町国分本村触

③壱岐氏居舘跡　平成６・８年度調査（一般国道３８２号改良工事）

・壱岐郡芦辺町国分東触

3．それぞれの遺跡の調査と執筆は，以下の分担で行った。

①百合畑古墳群第１・16号墳　平成７年度調査（宮崎貴夫）

・文責（宮崎貴夫）

②山ノ神古墳　平成８年度調査（川口洋平）

・文責（川口洋平）

③壱岐氏居舘跡　平成６年度調査（町田利幸・石尾和貴・松永泰彦）

・文責（安楽勉・町田利幸）平成８年度調査（安楽勉・町田利幸）

4．本書関係の出土遺物と図面および写真類は，現在，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所に保管されている。

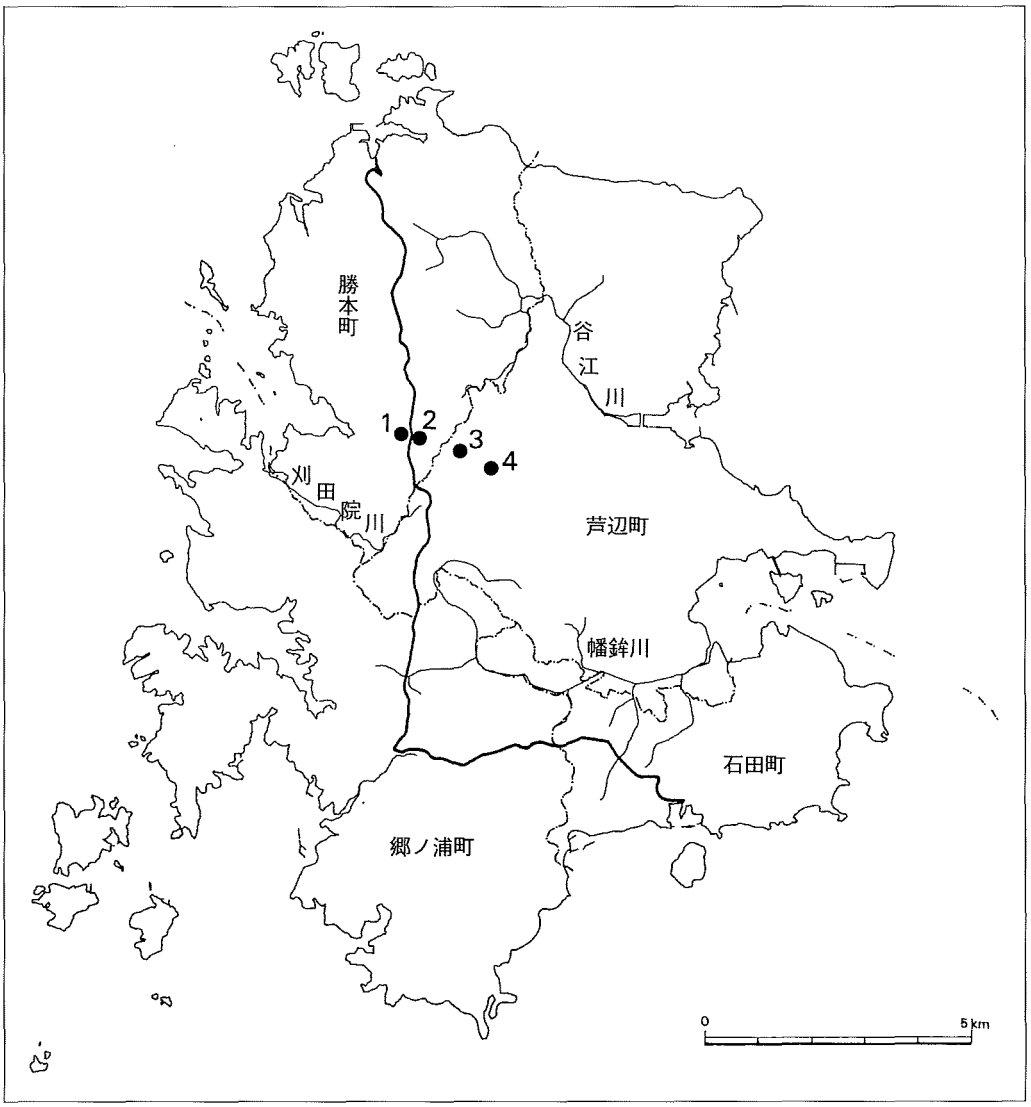
5．本書の総編集は，宮崎が担当した。

総　目　次

Ⅰ．百合畑古墳群第１・16号墳……3
　１．遺跡の立地と環境 ……3
　２．調査の経緯 ……5
　３．調　　査 ……6
　　(1)　百合畑古墳群第１号墳の調査 ……6
　　(2)　百合畑古墳群第16号墳の調査 ……6
　４．ま　と　め ……6

Ⅱ．山ノ神古墳……15
　１．遺跡の立地と環境 ……15
　２．調査の経緯 ……16
　３．調　　査 ……17
　４．ま　と　め ……20

Ⅲ．壱岐氏居舘跡……29
　１．歴史的地理的環境 ……29
　２．調査の経緯 ……30
　３．土　　層 ……31
　４．遺　　構 ……31
　５．平成８年度本調査 ……35
　６．出土遺物 ……36
　７．ま　と　め ……36



遺跡の位置

1　百合畑1号墳　　2　百合畑16号墳　　3　山ノ神古墳　　4　壱岐氏居館跡

Ⅰ．百合畑古墳群第１・16号墳

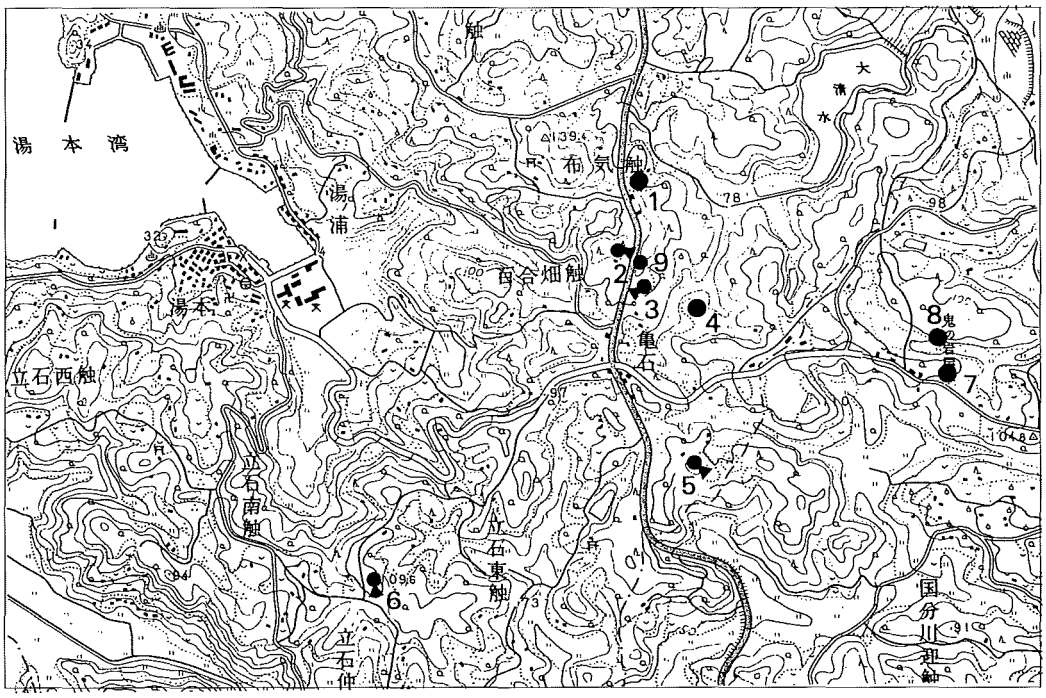
Ⅰ．百合畑古墳群第１・16号墳

１．遺跡の立地と環境

壱岐は，九州本島北西海上の玄界灘にあり，南北17km，東西15km，面積139km²の小規模な島である。島の基盤をなすのは，第三紀層の堆積岩で，そのうえを玄武岩がおおう低平な島である。壱岐島は，福岡市の北西67km，佐賀県呼子町の北26km，対馬の南東67kmに位置し，大陸と九州本土との間にあるところから，古くから対馬とともに大陸交渉や交流の歴史において重要な役割を果たしてきた。

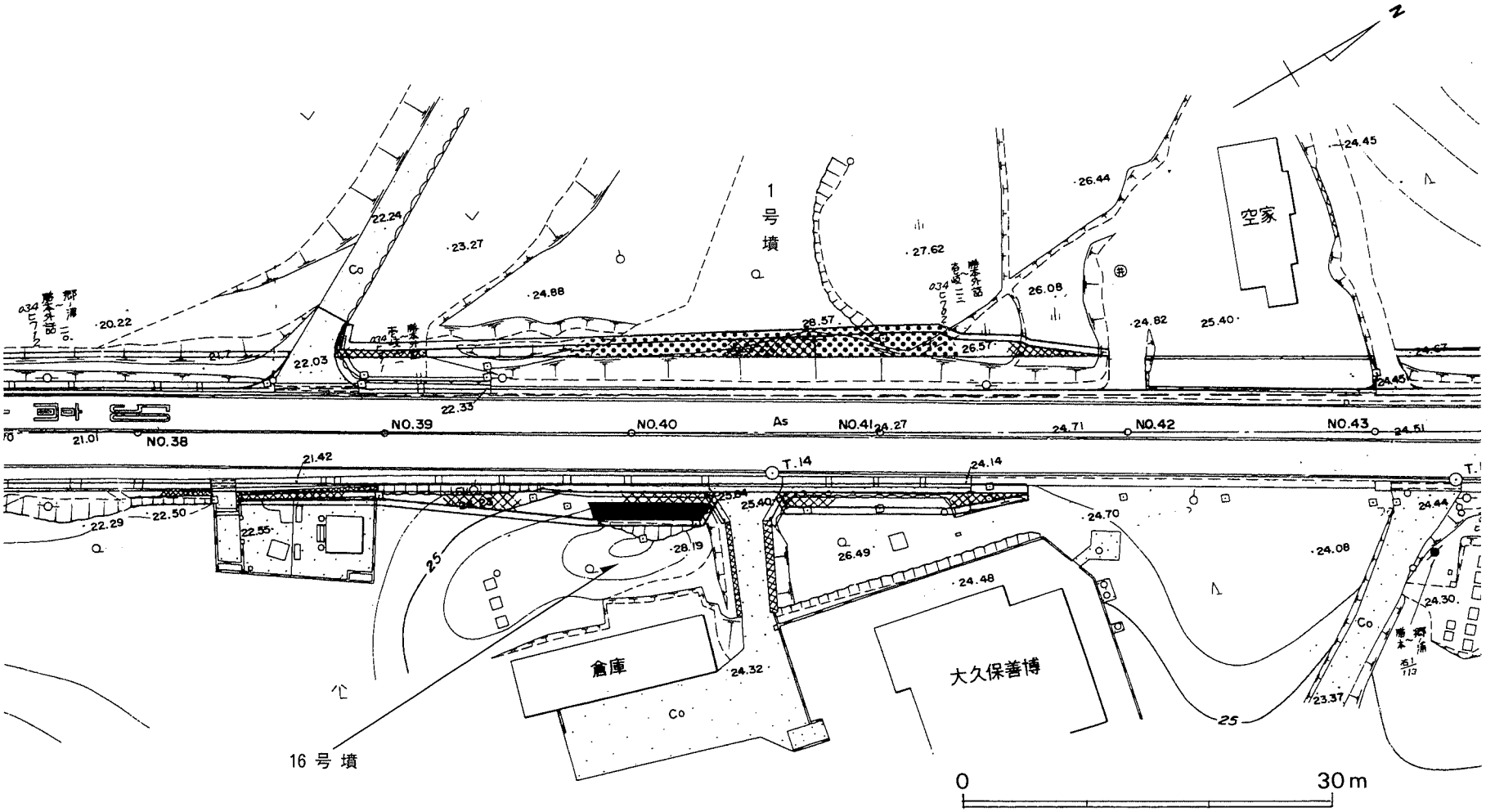
壱岐では，現在264基の古墳が知られていて，この数は県内の古墳の数の半数以上を占めている。県土の面積の3.3%ほどの島にこれほど多くの古墳が造られたのは驚きである。

また壱岐の古墳は，「鬼の岩屋」と呼ばれる巨大な石を使った横穴式石室をもつ後期古墳が多くみられるのが特徴である。古墳は，島内の中央部，特に勝本町鯨伏地区と芦辺町国分地区との町境付近に集中した状況がみられ，今回の調査対象となった百合畑古墳群第１号墳と第16号墳もその中心地域に存在する。一帯には，県内を代表する大形墳が存在している。５は，墳長90mの県内最大規模の前方後円墳である勝本町双六古墳（６世紀中頃）。６は，墳長65mの前方後円墳である勝本町対馬塚古墳（６世紀前葉）。４は，径66mを測り県内最大規模の円墳である勝本町笹塚古墳（６世紀後葉）。この古墳は，奈良県藤木古墳出土品に匹敵する馬具類が出土したことでも知られている。７は，石室全長16.5mの巨大な横穴式石室をもつ芦辺町鬼の窟古墳（６世紀末）。このほかにも，巨大な石室ををもつ円墳



第１図　主要古墳分布図（１/25,000）

2　百合畑古墳群第１号墳　　9　同第16号墳

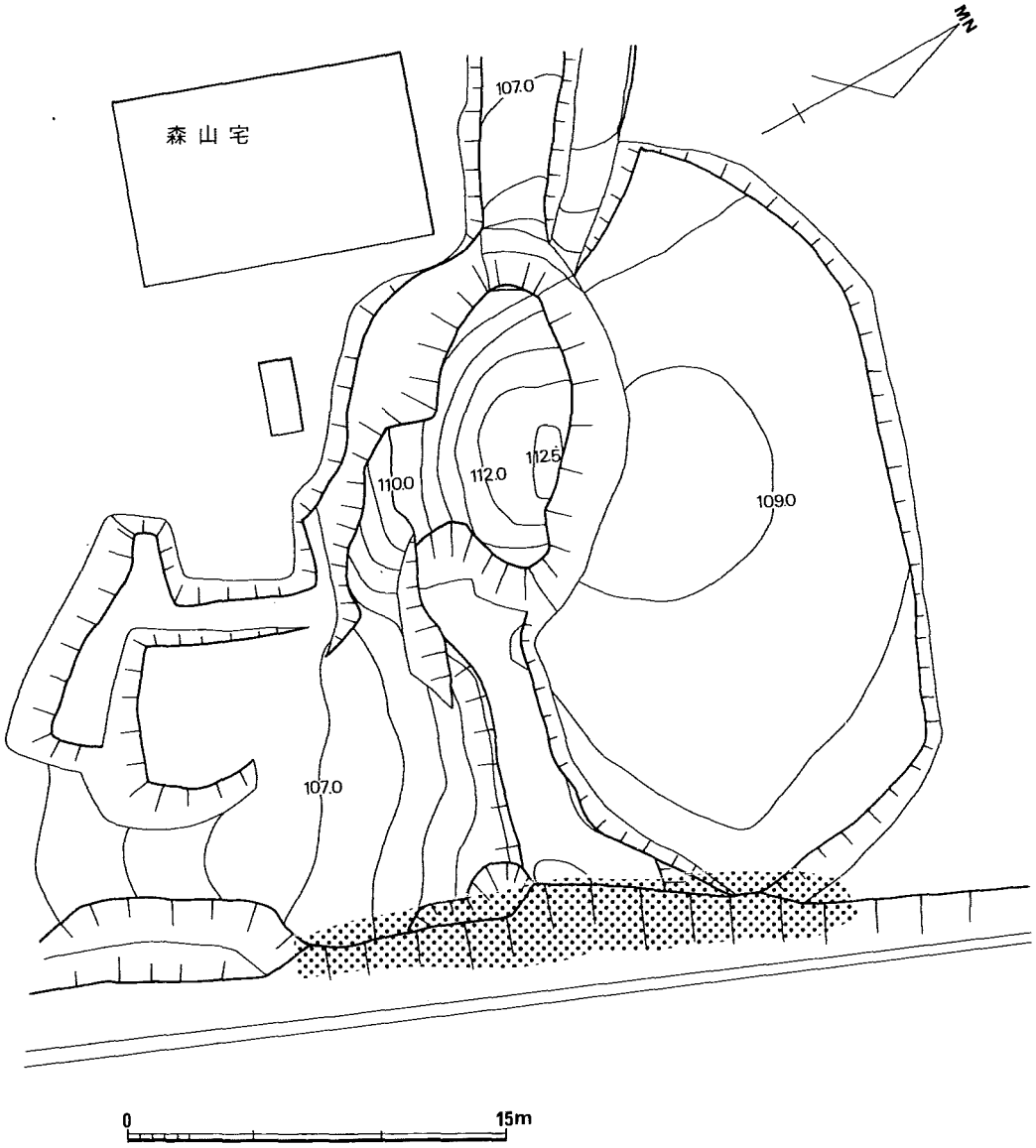


第２図　調査区域（１/500）　　アミ点が１号墳調査区，黒抜きが16号墳調査区

が多数あり，勝本町掛木古墳（1），芦辺町兵瀬古墳（8）が知られている。また，百合畑古墳群には，第1号墳（2），第20号墳（3）などの前方後円墳が存在している(註1)。

2．調査の経緯

百合畑古墳群は，勝本町の南端に位置し，標高90～110mほどの丘陵にある古墳群で南北300m，東西250mの範囲に拡がりをもつ23基の古墳から構成されている。今回の調査は，一般国道382号の歩道等の整備工事による拡幅工事によって百合畑古墳群の第1号墳（百合畑触字小場ノ辻519―1外所在）と第16号墳（百合畑触字生池528―1所在）が，部分的に掘削されるために調査を実施したものであ



第3図　百合畑古墳群第1号墳　調査区（1/300）（アミ点）

る。調査は，工事との兼ね合いで平成７年12月４日～平成７年12月６日と平成８年１月29日～平成８年１月30日の二期に分けて行い，第１号墳が面積56m²，第16号墳が面積20m²を発掘した。

調査関係者は以下のとおりである。

事業主体　長崎県壱岐支庁建設課

調査主体　長崎県教育委員会

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

所　　長	溝川　純浩（現壱岐教育事務所長）
課　　長	脇坂　正孝（現長崎南商業高校事務長）
係　　長	副島　和明（現文化課係長）
主任文化財保護主事	宮崎　貴夫（現場担当・現係長）

調査協力　倉元建設

３．調　　査

(1)　百合畑古墳群第１号墳の調査

本古墳は，東西方向を向く現存長26.5mの前方後円墳である。今回の調査は，国道の拡幅部分に前方部がかかるために，南北方向に長さ22mの調査区を設定して56m²を発掘した。調査は，主にバックフォーで掘り下げ，前方部の墳丘測量と壁面の観察を行った。調査の結果，地山の上に版築状の盛土を行っている状況が捉えられ，調査区西壁では前方部の幅が12.5mあることが確認された。

(2)　百合畑古墳群第16号墳の調査

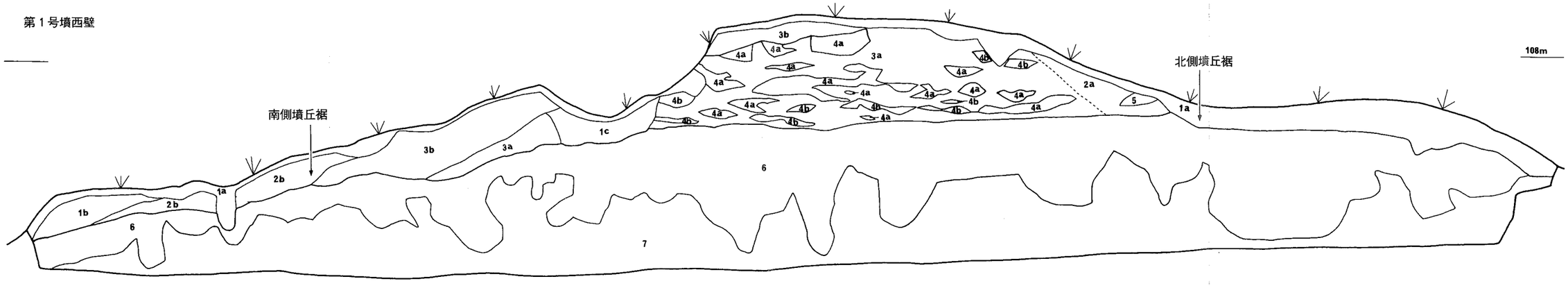
本古墳は，国道をはさんで第１号墳の南東に位置しており，現状では円墳の東側部分が残存したもの考えられている。今回の調査は，拡幅工事にかかる20m²についてバックフォーで掘り下げ，壁面の記録を行った。調査の結果，地山面を平らに削り，版築状の盛土を行っていることが観察され，墳丘の南側の立ち上がり（墳裾）が確認されたが，石室などの施設は検出できなかった。本古墳は，墳裾と現存の墳丘状況から判断すれば，径12m以上の規模をもつ円墳であったことが推測される。

４．ま　と　め

今回の調査によって，第１号墳が幅12.5mの前方部をもつ前方後円墳であることが確実となり，第16号墳が径12m以上の規模をもつ円墳であることが推測できるようになった。しかし，第16号墳については，第１号墳の前方部末端ではないかとの見解もあり，今後第１号墳の範囲確認調査を実施しなければ，この問題については解決しないと考えられる。今後の調査成果に期待したい。

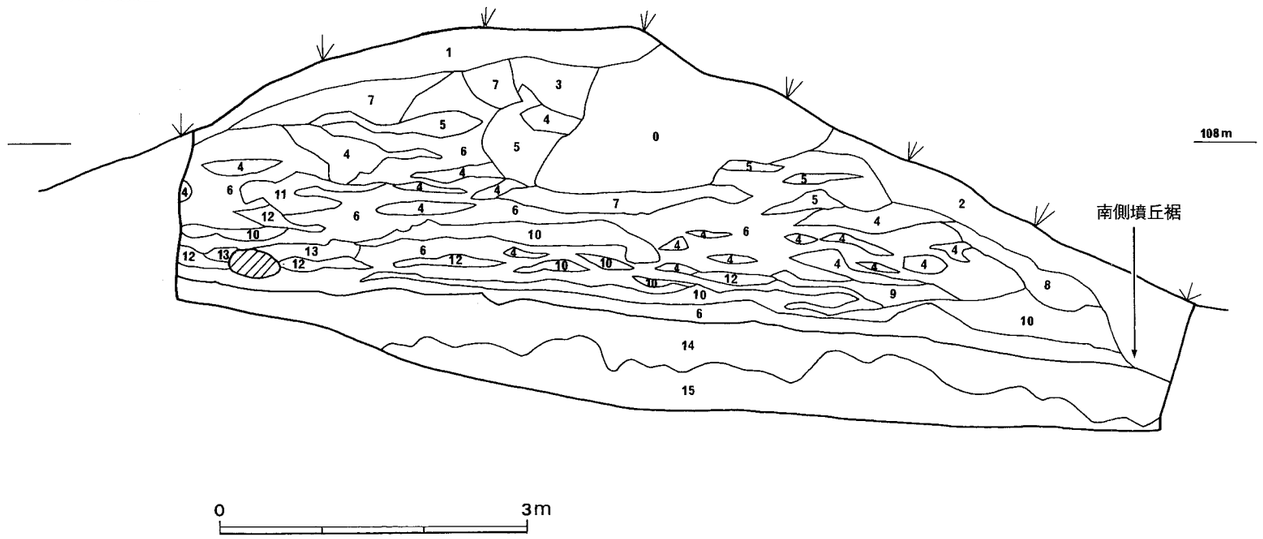
註(1)『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県文化財調査報告書第　106集　長崎県教育委員会　1992

第１号墳西壁



１ａ層　黒色土層（表土層）
１ｂ層　混礫灰黄褐色土層
１ｃ層　暗褐灰色土層
２ａ層　黒褐色土層
２ｂ層　灰褐色土層
３ａ層　褐灰色土層（締まりがない土層）
３ｂ層　褐色土層（締まりがない土層）
４ａ層　黄褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
４ｂ層　にぶい黄褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
５　層　淡褐灰色土層（地山がブロック状に入った土層）
６　層　淡灰色風化土粒混在橙色土層（地山）
７　層　淡灰色風化岩盤層（地山）

第16号墳東壁



０　層　褐灰色土層（攪乱層）
１　層　赤褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
２　層　暗赤褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
３　層　暗褐色粘質土層
４　層　明赤褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
５　層　灰褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
６　層　黒褐色粘質土層
７　層　淡灰色風化礫混在赤褐色粘質土層（締まりをもつ）
８　層　暗灰褐色土層（フカフカで軟弱な土層）
９　層　淡灰色風化礫混在褐灰色粘質土層
10　層　淡灰色風化礫を多く含む明赤褐色土層
11　層　淡灰色風化礫混在明赤褐色土層
12　層　暗赤褐色粘質土層
13　層　黒色土層
14　層　淡灰色風化礫混在橙色粘質土層（地山）
15　層　淡灰色風化岩盤層（地山）

第４図　百合畑古墳群第１号・16号墳　墳丘土層断面図（１/60）

図　　版

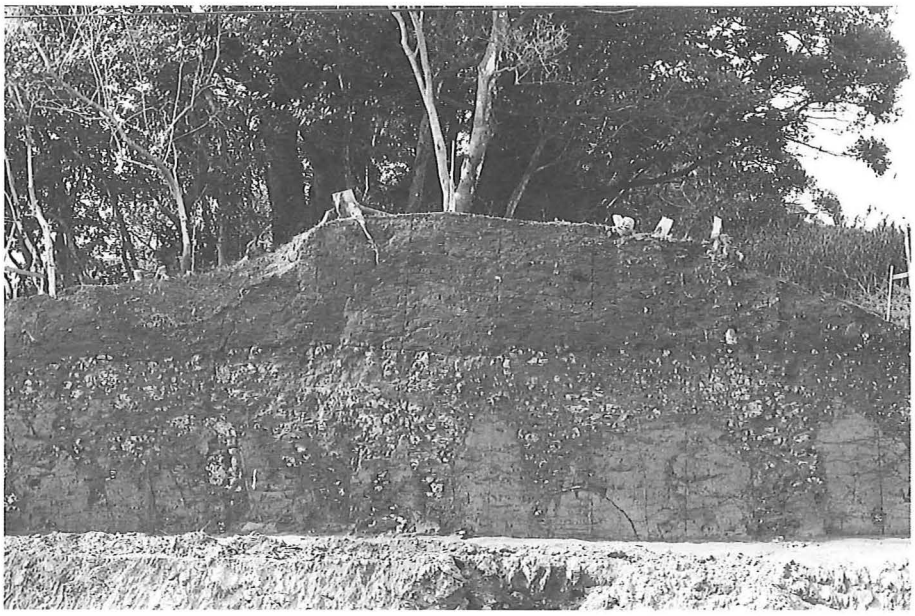
第16号墳
調査前の状況

第16号墳
墳丘壁面

第１号墳
調査前の状況

第１号墳
調査風景

第１号墳
墳丘壁面



第１号墳
同拡大

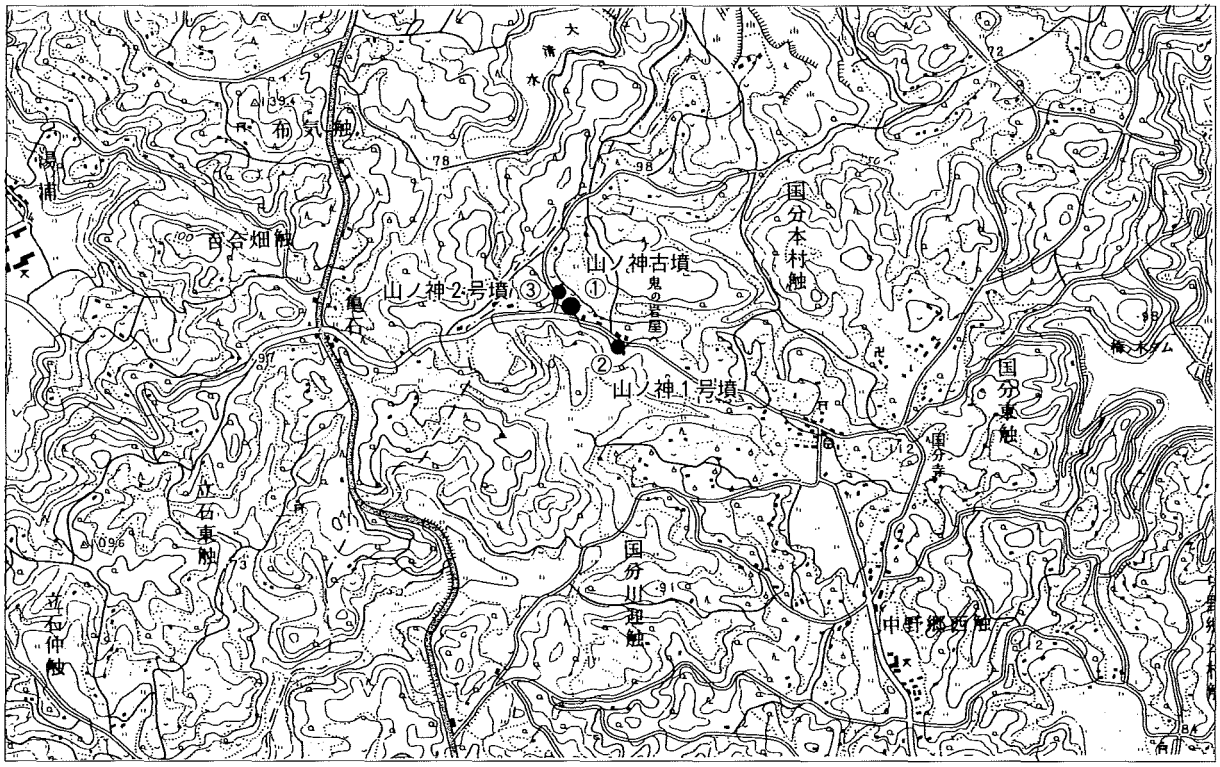
II. 山ノ神古墳

II．山ノ神古墳

1．遺跡の立地と環境

九州と朝鮮半島の間に位置する壱岐島には現在約270基の古墳があることがしられている。壱岐は東西約15km，南北約17kmあまりの島なので密度としてはかなり高いといえるだろう。これらの古墳の多くは古墳時代後半に造られた群集墳で，とくに島の中央部の国分地区に集中する傾向をもつ。付近には比較的大型の古墳も存在し，当時の壱岐島の首長クラスのものであると考えられている。その中でも最大のものは前方後円墳である双六古墳で，全長約90mの規模を誇る。円墳では鬼の窟古墳が最大で直径約45mあり巨大な石室をもつ。また，直径約38mの笹塚古墳からは金銅製の馬具が出土している。これらは単に島の首長のものと考えるには過ぎたものであり，大和政権や大陸との密接な関わりが推定されている。

今回調査を実施した山ノ神古墳は芦辺町国分本村触字仮塚にあり，この群集墳のひとつを形成している。鬼の窟古墳の西約300mに位置する円墳で，付近は標高約100mほどのゆるやかな斜面である。現状は山林であるが南側には拡幅される県道が走り，道路の反対側は急な斜面になっている。墳丘はよくのこるが数箇所の盗掘の跡が認められる。墳丘南側の羨道部付近は埋まり，天井石が露出している。開口した穴から一部石室の様子をうかがうこともできる。この石室前方には由来となった「山ノ神」という祠が祀られている。「山ノ神」は複数の古墳の名称として用いられており，今回調査した山ノ神古墳の周辺にも山ノ神１号墳と山ノ神２号墳がある。煩雑なため整理すると，山ノ神１号墳は前方後円墳であり，鬼の窟古墳の南西約100mに位置している。山ノ神２号墳は鬼の窟古墳から北西約500mに位置しており，やはり前方後円墳と考えられている古墳である。



第５図　遺跡位置図（Ｓ＝１/25,000）

2．調査の経緯

壱岐島の古墳はその数に比べて本格的な調査をされたものが少ない。それは山ノ神古墳においても例外ではなく松永泰彦氏による精力的な調査(1)の中で，簡略ではあるが石室の状況が記録されたことが唯一の調査記録である。

今回の調査は長崎県が一般県道湯ノ本芦辺線の改良工事を計画し，山ノ神古墳の墳丘の裾の一部が工事にかかることから，関係機関の協議の結果，工事に先立って原の辻遺跡調査事務所が実施したものである。調査は工事にかかる石室前方部に調査区を設定して行い，あわせて墳丘の測量も実施することとした。調査は平成８年12月３日から12月18日にかけて行い，調査面積は51m²である。

関係機関は以下のとおりである。

事業主体　壱岐支庁建設課

調査主体　長崎県教育委員会

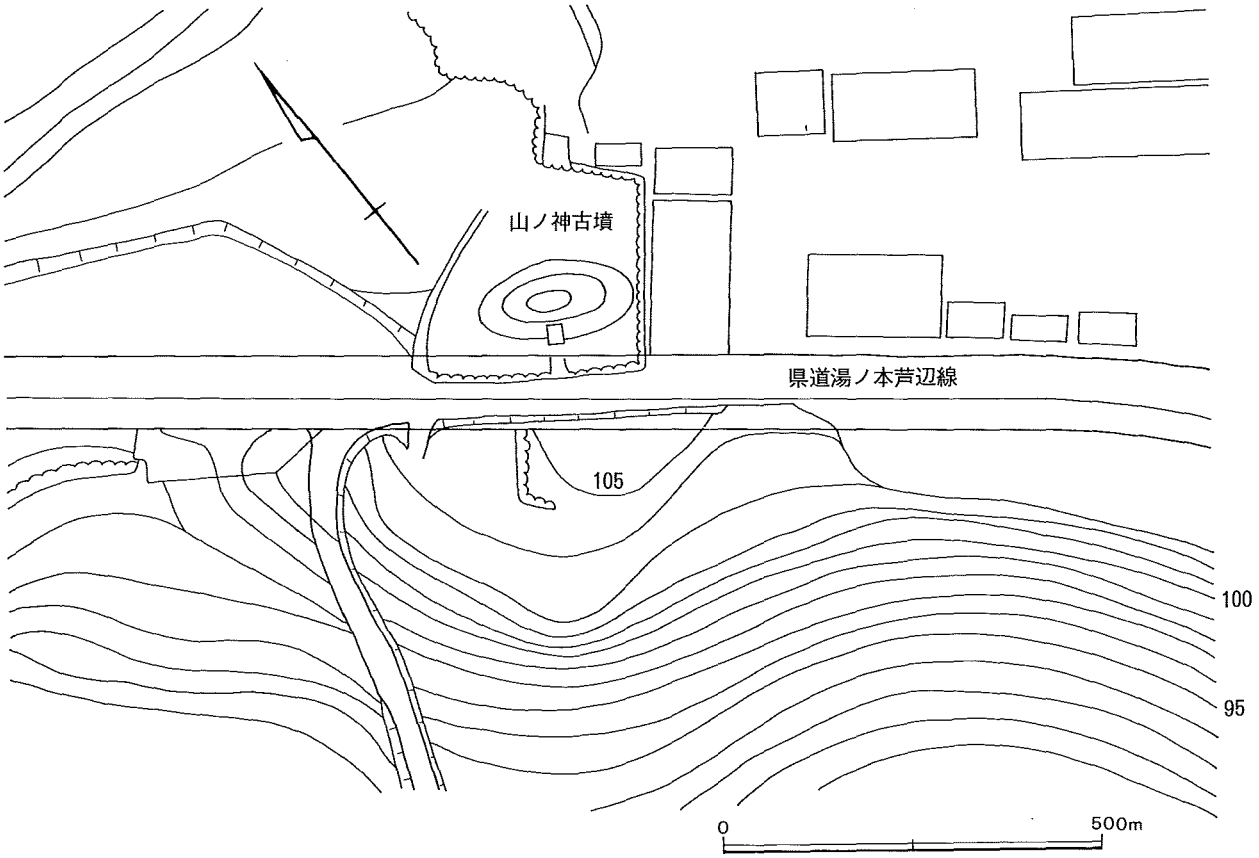
調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

所　　長　　田　川　　肇

課　　長　　安　楽　　勉

文化財保護主事　川　口　洋　平（現場調査担当）

註(1)　松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐　第15号』壱岐史蹟顕彰会　1981



第６図　工事予定図（Ｓ＝１/1,000）

3．調　　査

(1)　調査方法

調査は３ｍ×５ｍの調査区を連続して設定し，Ａ，Ｂ，Ｃ区とした。Ａ区は東側にやや拡張し，Ｃ区の西側も拡張してＤ区とした。Ａ～Ｄ区を合計した面積は51.0㎡である。付近は山林であったため，木の根を切断した後に人力による掘り下げを行った。また，調査に並行して墳丘の測量も実施した。

(2)　土　　層

土層は基本的に５層に分かれる。第１層は表土で山林特有の腐葉土である。第２層は茶褐色土層で流れ込みの遺物を包含している。第３層は黒灰色土層で流れ込みの遺物包含層である。第４層は淡黄褐色土層で上部に遺物を含む場所もある。第５層は赤味を帯びた黄褐色の地山である。以上の土層は版築等の人工的な堆積を示すものではなく，自然な堆積であるといえる。

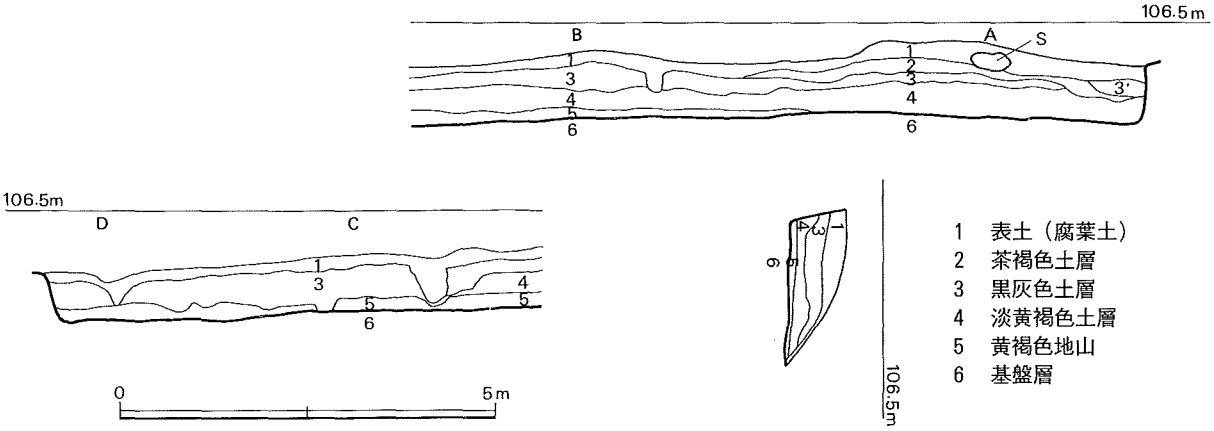
(3)　墳　　丘

墳丘の現状は木に覆われ山林の一部となっており，数箇所の盗掘坑が認められる。石室についても天井石前方付近に祠が祀られるなど旧状とは異なっている。墳丘の東側には長方形の張出しがあり積石が認められたが，これは中世の積石墓であると判断された。この積石以外に墳丘には葺石などは認められなかった。

墳丘測量の結果，墳丘の直径は約14m，高さは約3.3mであることが判明した。しかし調査を実施した墳丘の裾部の土層では版築が認められなかったことから封土が流れた状況が推測され，築造時の規模は現状よりやや小さく，高かったと思われる。

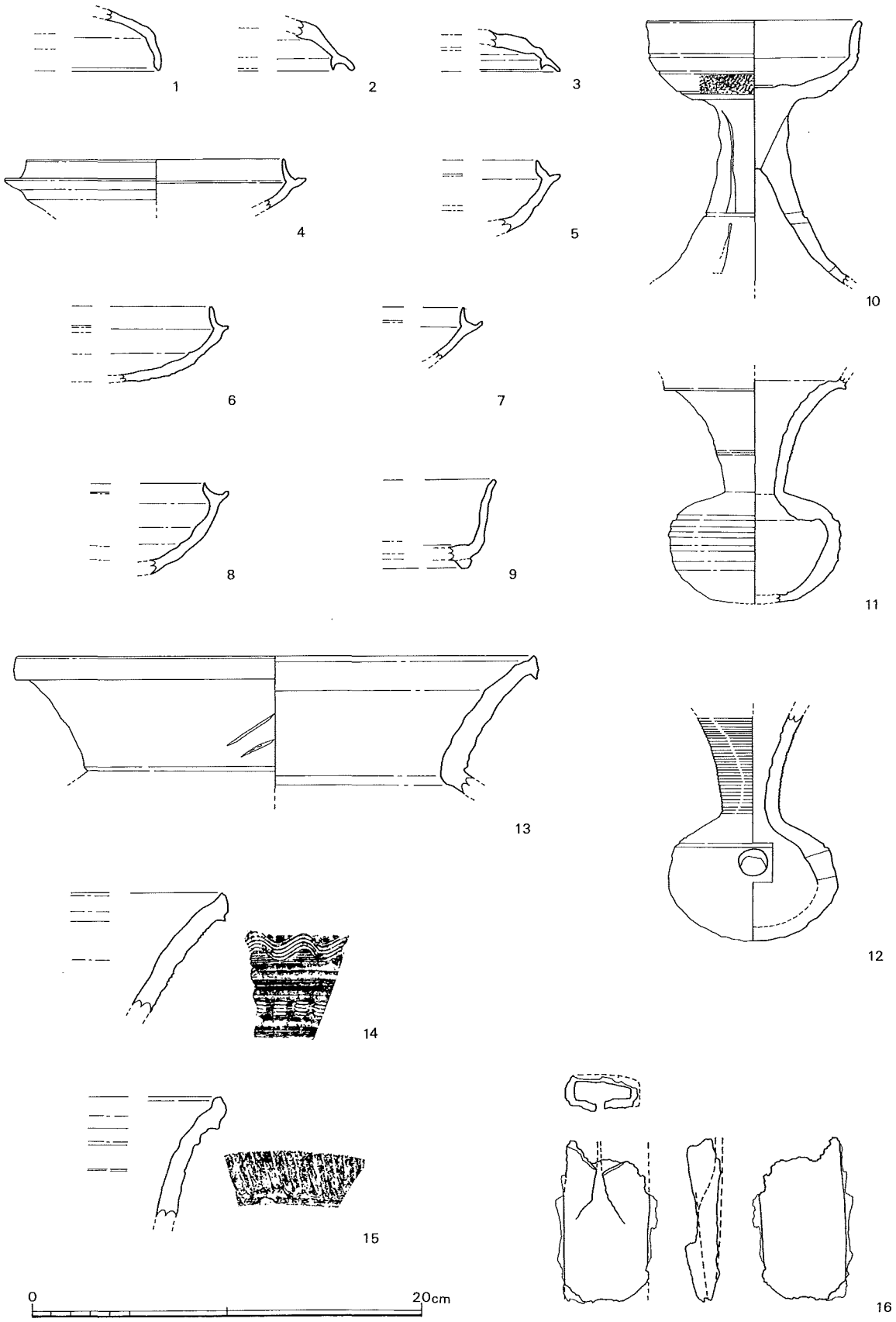
(4)　石　　室

調査を実施した訳ではないが，石室の現状について少し触れておく。石室は南側に開口する横穴式石室であるが羨道部付近が埋まり，天井石が露出している。この天井石の上に祠がある訳であるが羨道部付近の石に関しては原位置かどうか定かでない。開口した隙間からみると玄室内もかなり泥が堆積している様子であった。松永氏の調査では玄室の奥行きは2.8m，幅2.2mとなっている。石室の主軸については現状では正確な数値が求められないが，磁北に対しやや東に振れるようである。



第７図　土層断面図（Ｓ＝１/100）

第8図　墳丘および調査工域図（S＝1/200）



第９図　山ノ神古墳出土遺物（Ｓ＝１／３）

(4) 遺　物

遺物は1199点が出土した。内訳は須恵器908点，土師器290点，鉄器１点である。地区ごとの出土遺物数をみるとＡ区は58点，Ｂ区は547点，Ｃ区は540点，Ｄ区は54点となる。出土層位は第２層と第３層であるが，時期的な差はみられなかった。遺物を概観すると器種的には須恵器の甕が最も多く，次に杯類が多いようである。土師器については細片が多く不明な点が多い。16点を図化した。

１～３は須恵器の杯蓋である。１は小田富士雄氏(1)のⅣ期，２，３は身受けのかえりがつきⅤ期に相当するものと思われる。４～９は杯身である。４～６受部が横に張り，立ち上がりは比較的明瞭である。ⅢＢ期か。７，８は受部の張りが弱く，立ち上りも退化しておりⅣ期に相当するものと思われる。９は高台がつき，まっすぐに立ち上がる。口縁部はやや外反する。８世紀後半のものであろう。

10は高杯で脚部に透し窓が施される。Ⅲ～Ⅳ期のものであろうか。11，12は瓶で頸基部はともに細くしまる。11は胴部の肩がやや張る。ともにⅣ期頃か。13～15は甕である。13は外面下半にヘラ記号のような線刻がある。14は外面に線刻文が，15は波状文がそれぞれ施されている。16は鉄斧である。

註(1)　小田富士雄ほか『八女古窯跡群調査報告Ⅰ～Ⅳ』八女市教育委員会1969～1972

４．ま と め

今回の調査を総括すると次のようなことがいえるであろう。第一に調査を実施した墳丘の裾と考えられた場所は版築状の土層が認められなかったことから，本来の墳丘の一部ではなく墳丘に隣接した場所であったと考えられる。墳丘は長い歳月の間にその封土が流れ，形態的にやや崩れて拡がる傾向をもつことから，その一部が堆積したものであろう。

第二に出土した遺物についてであるが，これらの遺物は古墳の祭祀に使用されたものと考えられる。遺物は流れ込みの第２層と第３層から出土しており，破片が多く原位置ではない。おそらく石室入り口かその周辺において祭祀が行われたものと思われる。祭祀の行われた時期は６世紀後半から８世紀後半頃までと考えられるが，概観ではあるが数量的な変遷を追うと６世紀の後半から７世紀初頭までが活発で，以降は散発的ではなかったかと推測される。築造年代はこれらのことから６世紀後半を下限としてとらえられるが，時期の特定には石室内の調査をはじめより綿密な考証が必要であろう。

以上のことから，現時点で山ノ神古墳はどのように位置付けられるであろうか。山ノ神古墳のある国分周辺には壱岐を代表する大きな古墳が集中することは前にも述べたが，これらの古墳は島の首長クラスのものであると考えられている。限られた調査を通じてであるが，これらの古墳は６世紀後半頃に次々と築造されたことが推測されている。その背景には朝鮮半島の緊張と大和政権の関わりがあったとされ，地理的に壱岐の首長階級が重要視されていたためであると考えられている。山ノ神古墳の被葬者はその規模からいって首長クラスとは考えられないが，築造の場所からみると首長の一族に連なる者か，権力を構成した部下の一人ではなかったかと推測されよう。

図　　版

調査前風景

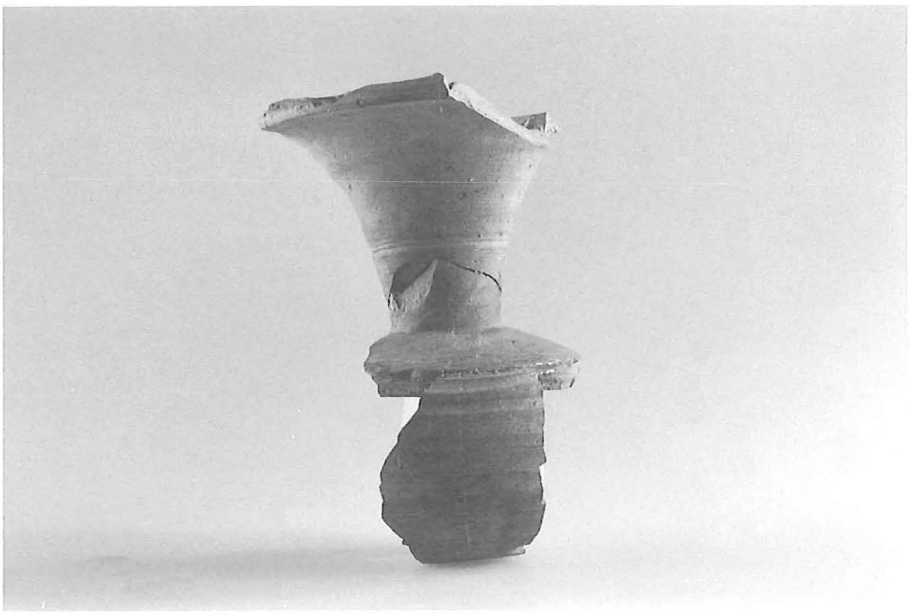
調査風景

墳丘と土層
（西から）

墳丘と土層
（南から）

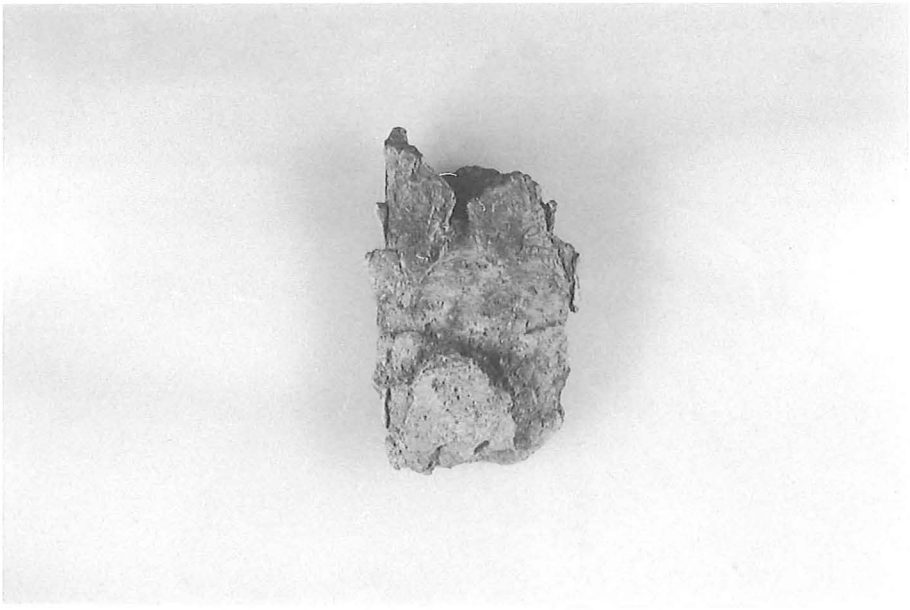
Ｂ区　東側土層

石室内部の様子



聰　11

聰　12



鉄斧　16

III. 壱岐氏居館跡

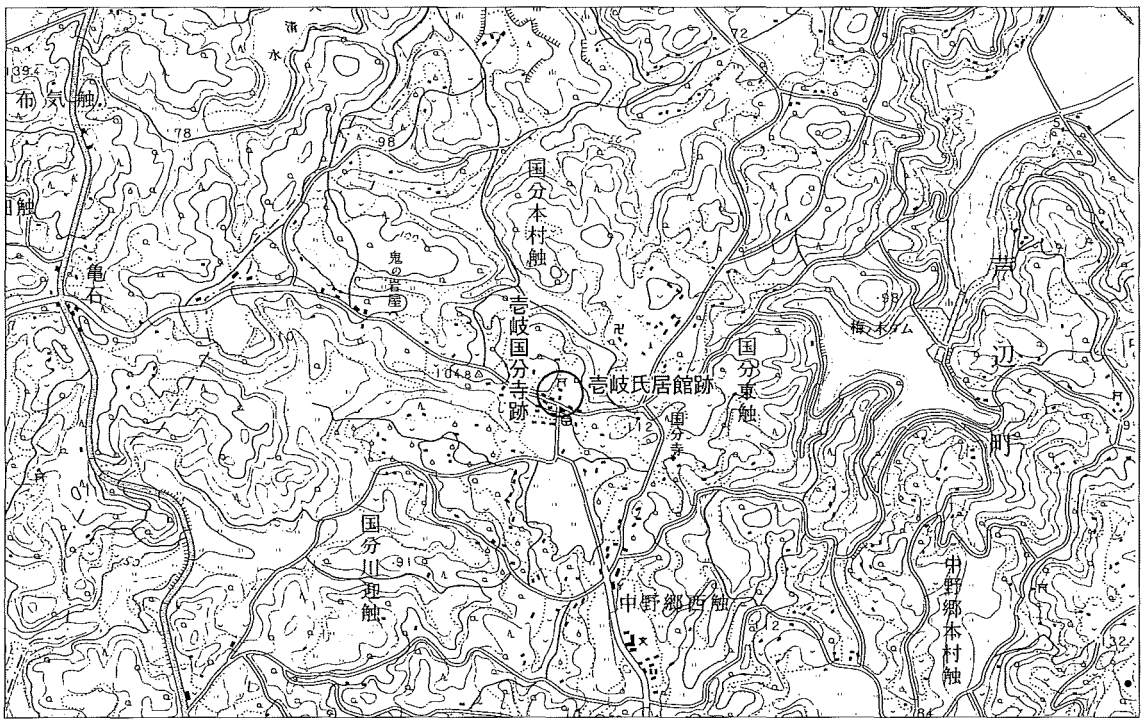
Ⅲ．壱岐氏居館跡

１．歴史的地理的環境

玄界灘に浮かぶ壱岐島は，南北17km，東西16kmの手のひら状の島である。対馬と並んで大陸との飛び石的役割を果たしてきた。古い遺跡は旧石器時代にはじまり，各時代まんべんなく所在し考古学的な調査も大きな進歩を遂げている。そんな中で最も解明が進んでいるのが芦辺町と石田町にまたがる原の辻遺跡である。多重環濠に囲まれた大規模集落で魏志倭人伝に記載された一支国の王都に特定されている。古墳時代の墳墓も現存するものが265基知られ，その中には約100mに達する前方後円墳の双六古墳や，巨石古墳で名高い鬼の窟古墳や笹塚・掛木古墳が位置する。

壱岐の古代を代表する遺跡としては壱岐嶋分寺（国分寺）や串山ミルメ遺跡，それに本書で扱う壱岐氏居館跡などがあげられる。これら遺跡立地の背景には，律令制度下における中央との結び付きが考えられる。この制度下，壱岐，対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱われている。従って国府が置かれ，国分寺が設置されることとなった。しかし，壱岐には新たに国分寺を造る経済的基盤がなかったと思われ，在地豪族であった壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が「延喜式」（玄蕃寮）に見える。それによると「壱岐嶋直氏寺為分寺。置僧五口」とあり，規模の小さいことがわかる。

壱岐氏は，島内の主要な浦々と海上ルートを掌握し，島の中央部である国分に本拠地を構え，一族繁栄の基盤を固めている。中世になると，松浦党が勢力を伸ばし，衰退していく。



第10図　周辺地形図

2．調査の経緯

平成６年度に県道路建設課事業として県道湯ノ本芦辺線道路改良計画の報告があり，事業計画地区について現地確認踏査を実施した。

計画路線の現地踏査の結果，壱岐国分寺跡・壱岐氏居館跡・山ノ神古墳・双塚１号墳が計画事業区内に所在していた。

このため，本年度着工予定の壱岐国分寺跡(註1)・壱岐氏居館跡(註2)の２遺跡について範囲確認調査(国分寺跡15m²・壱岐氏居館跡67m²）を平成６年６月14日～６月23日の間に実施した。

調査の結果，壱岐国分寺跡については，地山面まで削平を受けており、遺構・遺物の包含層を確認できなかった。

壱岐氏居館跡は，道路拡幅に伴って国片主神社の社務所・鳥居・土俵の移転建設予定地の調査を行い，中世～近世の遺構・遺物の存在が認められ，遺跡についての取り扱いを事業者側と協議を行った。

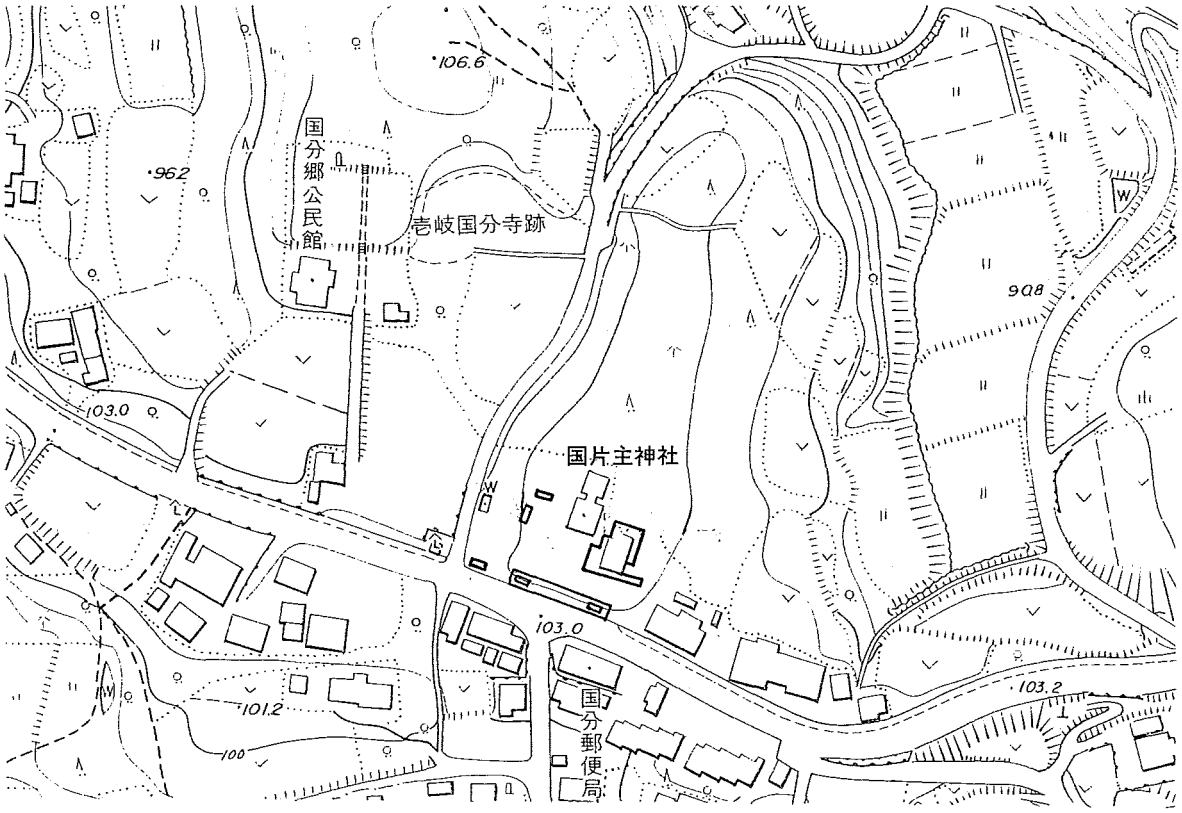
協議の結果，設計変更ができない社務所・鳥居の建設予定地(229m²)について平成６年７月19日～平成６年８月19日の間に調査を実施した。

なお，道路拡幅計画部分については，平成８年度事業として７月22日から７月31日の間実施した。

註

(1) 長崎県教育委員会1996『長崎県埋蔵文化財調査年報III』「⑫壱岐国分寺跡」

(2) 長崎県教育委員会1996『長崎県埋蔵文化財調査年報III』「⑬壱岐氏居館跡」



第11図　調査区配置図

3．土　　層

基本層序は，１層が腐植土，２層が暗黄色弱粘質土，３層が暗茶黒色土，４層が明黄色粘質土となっている。

ただし，範囲確認調査では，ＴＰ５区の３層と４層との間に暗黄茶褐色粘質土が堆積していたが，本調査においては，３層の暫位層としてあつかった。

遺物は，２層に近世のかわらけ・貨幣等の出土品があり，３層と４層上面にかけて中世の土師器・輸入陶磁器等が出土した。

4．遺　　構

(1)　範囲確認調査

ＴＰ１～ＴＰ７区の７箇所について調査を実施し，ＴＰ３・ＴＰ４・ＴＰ５・ＴＰ６から遺構を検出している。これ以外のＴＰ１・ＴＰ２・ＴＰ７区については，調査の結果，地山面まで後世の削平を受けており遺構を確認できなかった。

以下に確認調査での検出遺構について説明を加えておきたい。

・ＴＰ３区

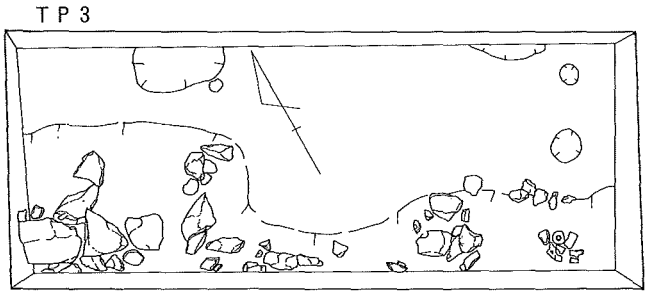
２×５ｍの試掘壙を設定する。調査区は，道路沿いにあたり桜・楠等が植栽されている。遺構は，試掘壙南側に段差のある地山面に小礫が東西に並び，南側隅に約1.1ｍの長さに20～30cmの角礫が３個配置されていた。遺物は近世陶磁器片が混入している。

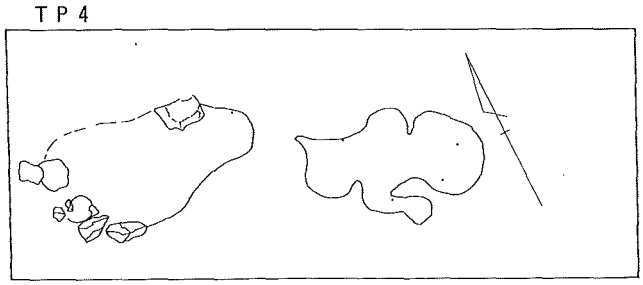
・ＴＰ４区

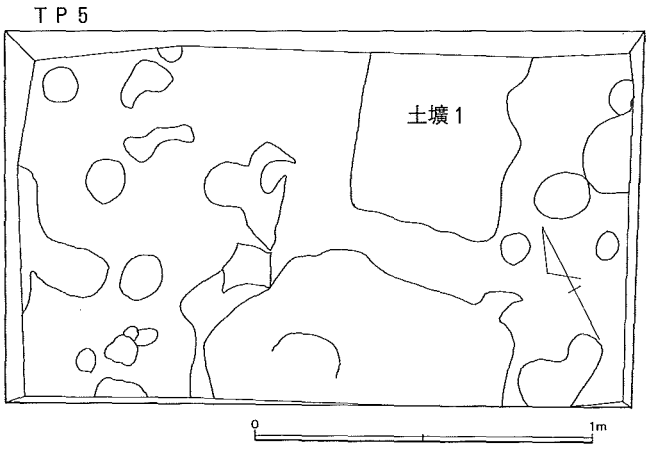
２×５ｍの試掘壙を社務所と神社の間の東側に設定し精査を行う。２層面に糸切り底の土師器集中部２箇所を検出し，土師器１群と土師器２群として記録を行った。

土師器１群は，長さ約1.7ｍ×幅0.85ｍの楕円形を呈している。

土師器２群は，１群から約0.35ｍの間をおいて東西約1.4ｍ×南北最大0.85ｍに集中箇所が認められた。







第12図　確認調査遺構検出図

・ＴＰ５区

神社の西側，雑木林の中に３×５ｍの試掘壙を設定する。４層の明黄色粘質土面で，土壙・柱穴を検出する。土壙・柱穴は，一部覆土を取り除いた外は現状保存を行っている。

ＴＰ６区は，３層下部に南北に延びた礫の集中箇所（幅約１ｍ）を検出している。

(2) 平成６年度本調査

調査区は，Ａ～Ｇを東西に，１～５を南北に記号番号を付し４×４ｍを１区画として遺構図を作成した。

遺構は，中世の土壙・溝・柱穴群を４層上面で検出している。

・１Ａ・１Ｂ区

不定形な，土壙が１Ａ区北東側と東壁に認められた。また，１Ａ・１Ｂ区は径が20～70cmの柱穴を検出するが建物跡復元までの配列を確認するまでにはない。

・２Ａ・２Ｂ区

東西に延びた溝１を検出。溝の最下底は，長さ3.3m，幅0.4mを測る。溝の上面は，幅1.3m，長さ4.7m，地山面からの深さ60cmを測る。

溝１は，東側端部及び西側がほぼ直角に折れており，建物跡に付属する溝と考えられる。

土壙３は，２×1.3mの東西が長く，南側に張り出し，角の取れた三角形状を呈する。地山面からの深さ約40cmを測る。内部からは，土師器の皿片が集中して出土している。

・３Ａ・３Ｂ・３Ｃ区

柱穴群と不定形土壙を検出する。

柱穴は，地山面から深さ15～25cmの比較的浅いもので，径が35cm程を測る。

不定形土壙は，３Ｃ区に３箇所認められたが，何れも10cm前後と浅く，木の根による撹乱と見られる。

・４Ａ・４Ｂ・４Ｃ・４Ｄ区

土壙１・土壙２・集石土壙を検出する。

土壙１は，長さ4.9m，幅２ｍ，深さ70cmを測り，内部に20～40cmの角礫の集中箇所が認められる。礫の検出状況から土壙廃棄後に，設置された建物跡の礎石と考えられる。土壙内部からは，鉄滓及び青磁，土師器片が出土する。土壙は，鉄滓が出土していることから鍛冶関係が考えられるものの、鞴の羽口や焼土等を確認できず性格については判然としない。

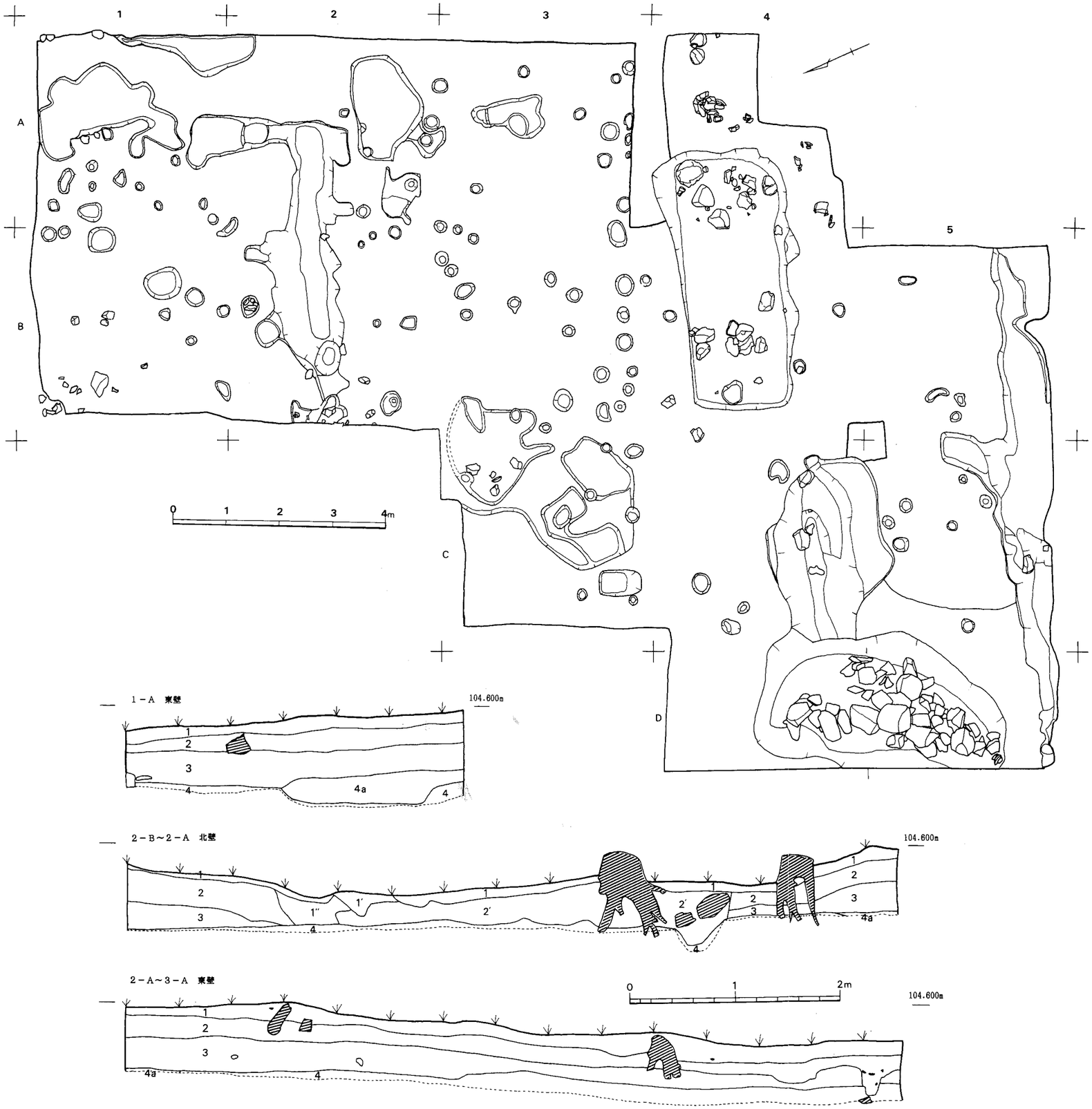
土壙２は，長さ3.55m，幅2.4m，最深部で0.5mを測る。プランは，歪な楕円形をなし中央部が溝状に西側へ延び集石土壙に分断されている。

集石土壙は，50～60cm代の礫が投げ込まれた状況で検出した。形状は，楕円形を呈し、長軸4.8m，短軸2.5mを測る。集石下部から明治期の陶磁器片が出土している。

・５Ａ・５Ｂ・５Ｃ・５Ｄ・５Ｆ・５Ｇ区

５Ａ～５Ｄ区の南側が神社境内を囲む石垣の内側にあたり，地山面まで削平を受けている。

５Ｆ・５Ｇ区は，石垣の基礎部を検出している。角礫３個半を５Ｇ区の東西1.1mに確認している。時期については，県道拡幅で境内が狭められた際に埋められたもので，明治以降の石垣である。



第13図　平成６年度本調査土層・遺構実測図

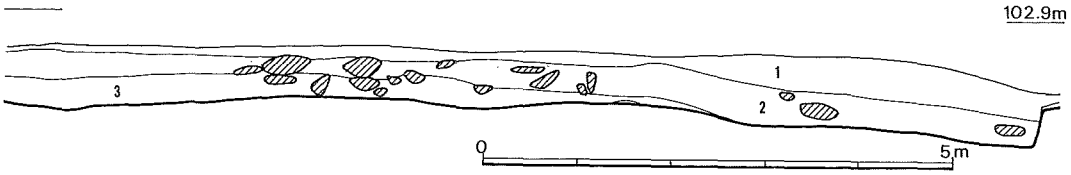
5．平成8年度本調査

道路に面した部分の本調査を行った。ここには鳥居や階段が設けられていたところである。東西に28m，南北に4mの幅で調査区を設定し，西からA～Eに区分した。

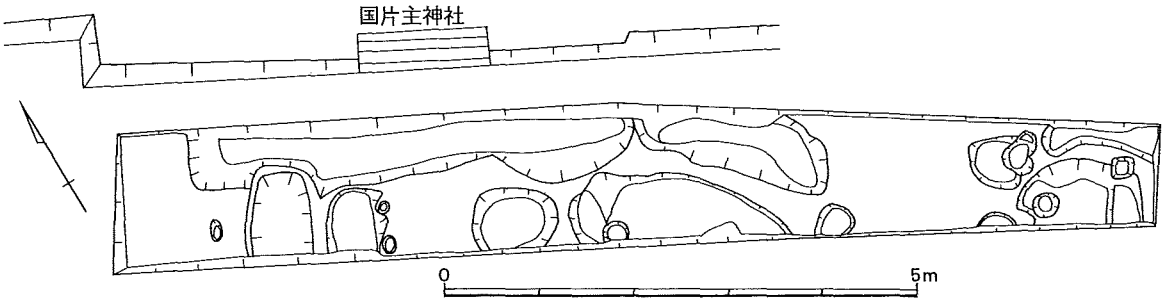
遺構は表土層下の黄褐色粘質土中に大礫や人頭大の礫が一面に出土し，礫群に混じって近世陶磁器も出土している。礫は雑然としており，人為的なものか不明である。この礫群を取り除くと，隅丸方形や楕円形の土壙が五箇所認められた。最大の土壙は直径が4m余りに達する。中からは土師器皿と思われる小破片が出土するのみで，中世までさかのぼると考えられる。東側のピットは近世に掘られたもので，切り合いの重なった部分もある。

土　　層

表土層は西側にうすく，東側に厚く堆積するが，東側は近世の撹乱を受け客土されているためである。2層の黄褐色粘質土はよくしまり，礫を多く含む。この層には近世陶磁器が含まれるので江戸時代以降のものと考えられる。鳥居も江戸時代のものであり，この時期に神社境内の造成が拡張された可能性もある。3層は暗黄褐色粘質土でやはり礫が含まれるが，2層ほどではない。輸入陶磁器片や土師器片が出土し，中世の包含層であることが確認された。



第14図　土層実測図



第15図　本調査遺構実測図

6．出土遺物（第16図1～第17図54）

これまでの調査によって出土した土器である。1～40は土師器である。1～26は皿で底は糸切り痕のあるものと，ヘラ切り痕に分かれる。34は板目圧痕が見られる。27，28，29，31，32は高台のついた皿であり，30は仕上がりは雑な作りであるが，高台付碗と思われる。43～52は中国輸入陶磁器である。43は越州窯陶器である器壁の釉が剝げ落ちているが，所々にあめ色の釉が残る。胴部下半には一条の沈線が巡る。成形はシャープで薄く仕上がっている。46は同安窯系櫛描文碗，44，47は白磁碗の口縁部である。49～52は同安窯系の皿で，48は白磁皿である。この他にも青磁，白磁の小破片が十数点出土している。

53は瓦質のすり鉢である。5条からなるハケ条沈線が内部に粗く施されている。口縁部は内側に丸くおさめられ，外側は底まで細いハケ目で調整されている。54は瓦質土器の片口である。焼きは甘く口縁はやや内向している。

この他には，近世陶磁器や灯明皿，寛永通宝などがあったが，神社に関係する遺物であると考えられる。

7．まとめ

壱岐氏居館跡は60m四方の敷地に空堀や土塁を備えていたといわれるが，昭和62年の範囲確認調査によってその所在が一部明らかになっている。しかし，壱岐氏の消長については不明な点が多い。隣接する嶋分寺は壱岐氏の氏寺をあてたとする説もあるが，何時の段階で嶋分寺に充てたのかの記録はない。嶋分寺の発掘調査の結果によると，古い時期の土器は8世紀中頃までさかのぼり，新しいもので8世紀後半ごろに比定され[注1]ている。また，巨石古墳の被葬者が壱岐氏の一族の流れをくむものであれば6世紀後半から7世紀前半であり，さらにさかのぼることになる。

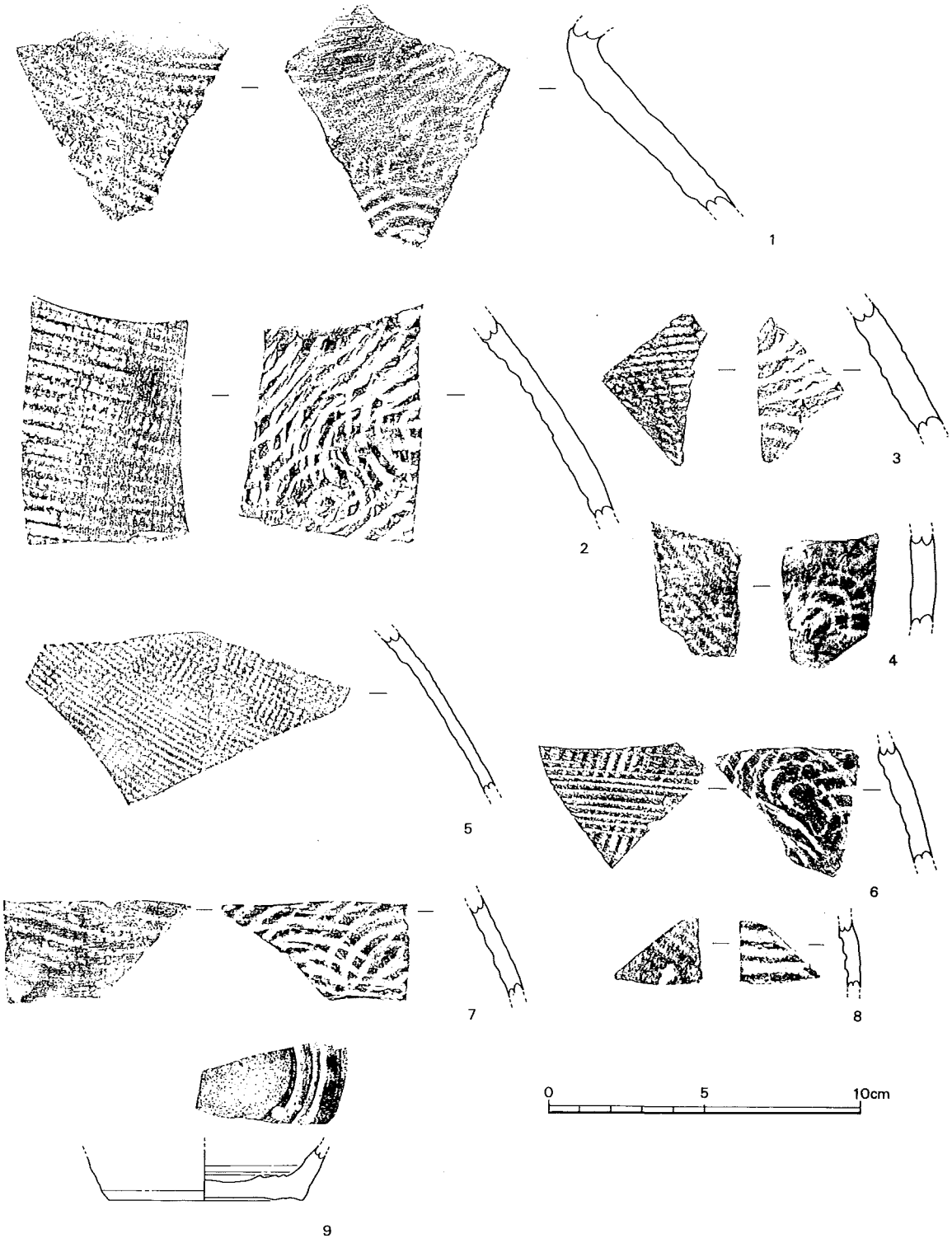
今回の調査では出土遺物で見るかぎりは，古墳時代の遺物は極めて少量であった。また土師器や輸入陶磁器は13世紀ごろまで確実に見られるが，この傾向は嶋分寺についても同じである。

現在の地には旧式内社として知られる国片主神社が鎮座している。壱岐氏は邸内にその分霊を勧請して，他に転じてからは壱岐氏の全宅地を神地として今日にいたったと解釈され[注2]ている。

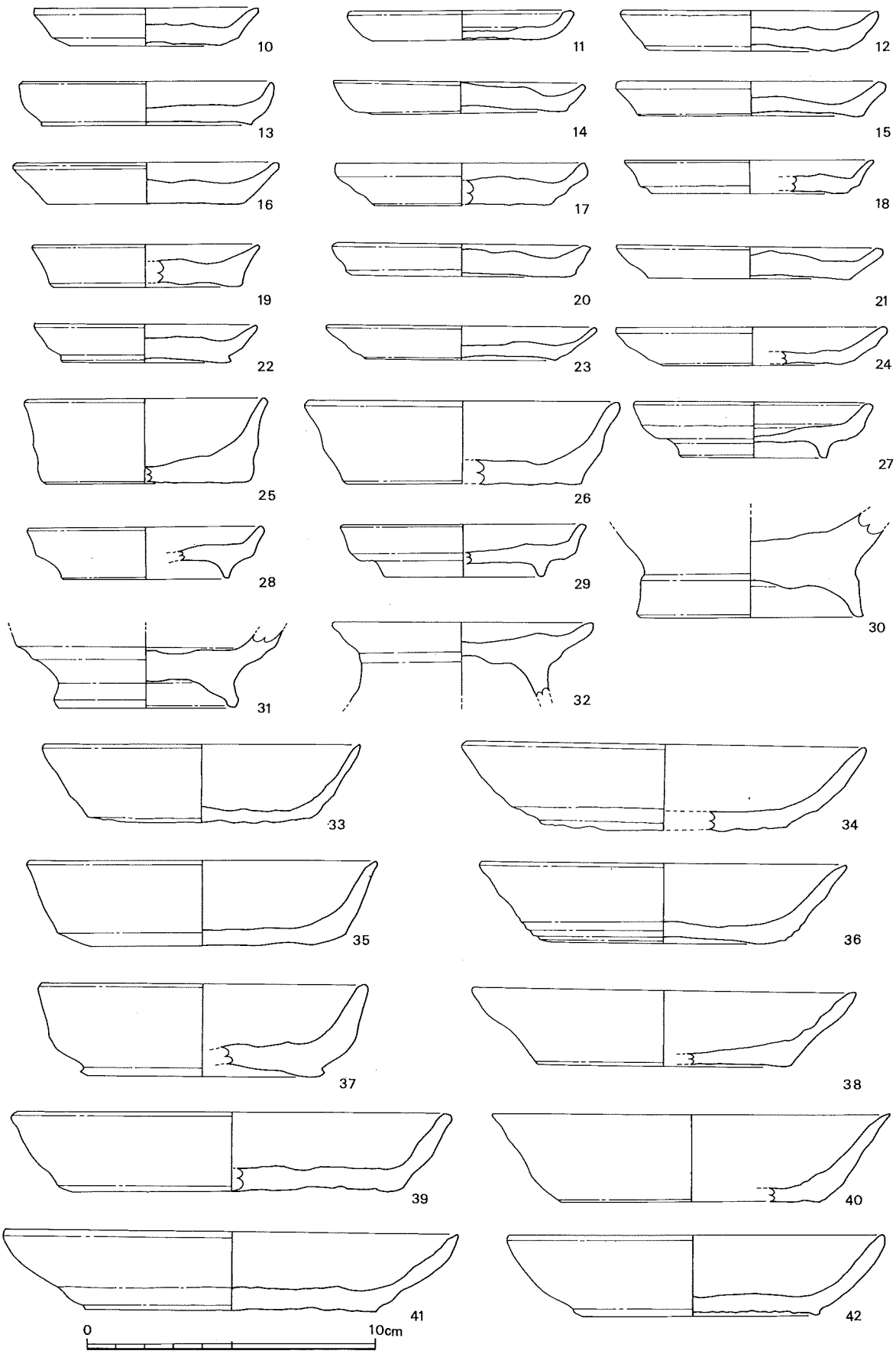
いずれにしても壱岐氏の影響が強い地域であり，柱穴群を含む建物跡や堀も確認されていることから，居館地としてふさわしい地といえる。壱岐氏の消長ついては，嶋分寺が10世紀頃一旦衰退しており，その原因として寛平6年（894）の新羅賊による襲撃や寛仁3年（1019）の刀伊の入寇という外敵の侵入があげられ衰退につながったのではないかと考えられており，壱岐氏についても組織的な機能が弱まり，中世には，姿を消していったと考えられる。

文献

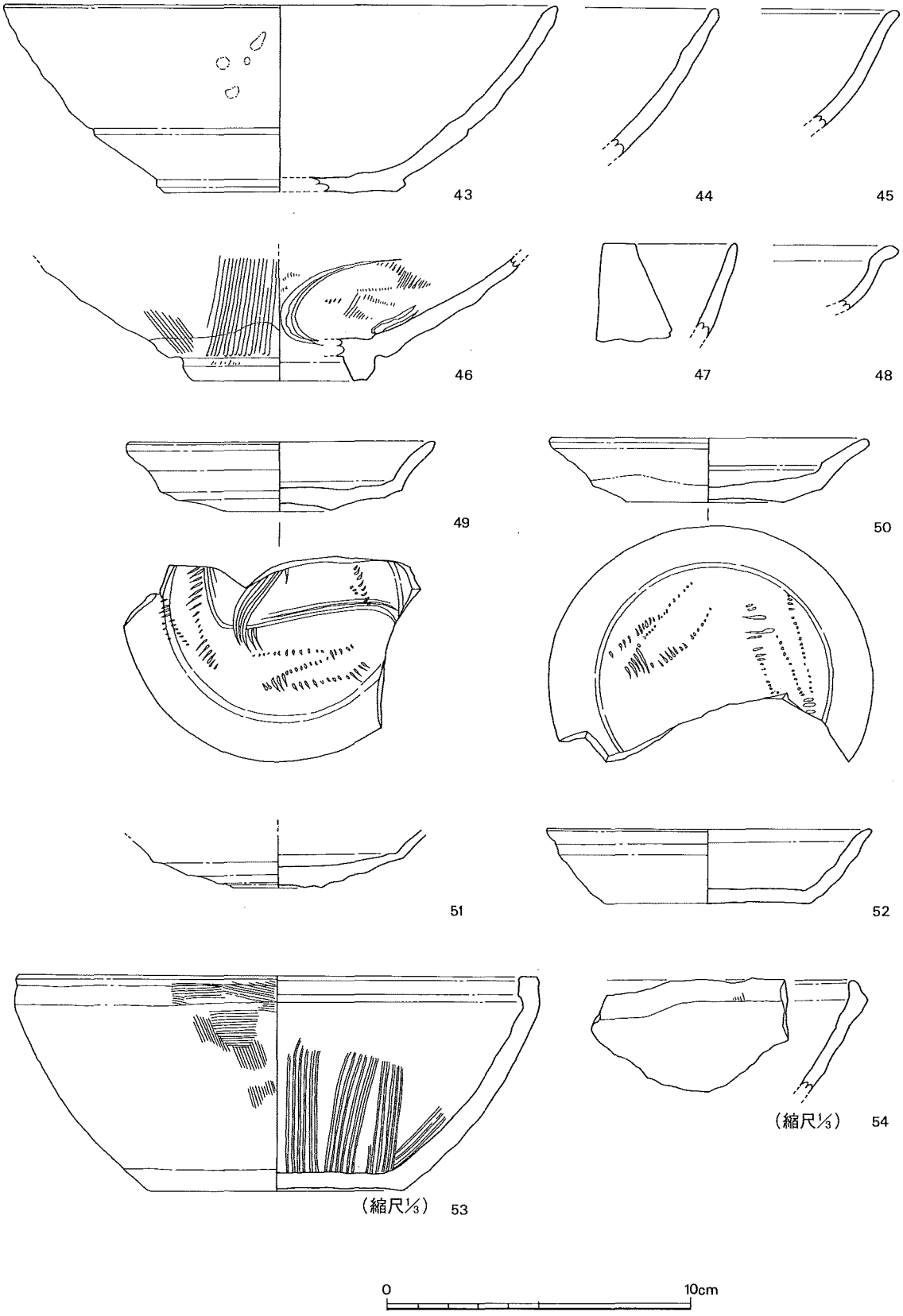
注1　高野晋司『壱岐嶋分寺』1991
注2　山口麻太郎『壱岐國史』長崎県壱岐郡町村会　1982



第16図　須恵器実測図



第17図　土師質土器実測図



第18図　輸入陶磁器及び瓦質土器実測図

図　　版

遺跡遠景

図版 2

平成 6 年度　調査区全景

平成 6 年度 1 ―A 区土層

平成 8 年度土層

調査区土層

図版 4

平成 6 年度溝 1

遺構出土状況

平成 6 年度ＴＰ５区遺構

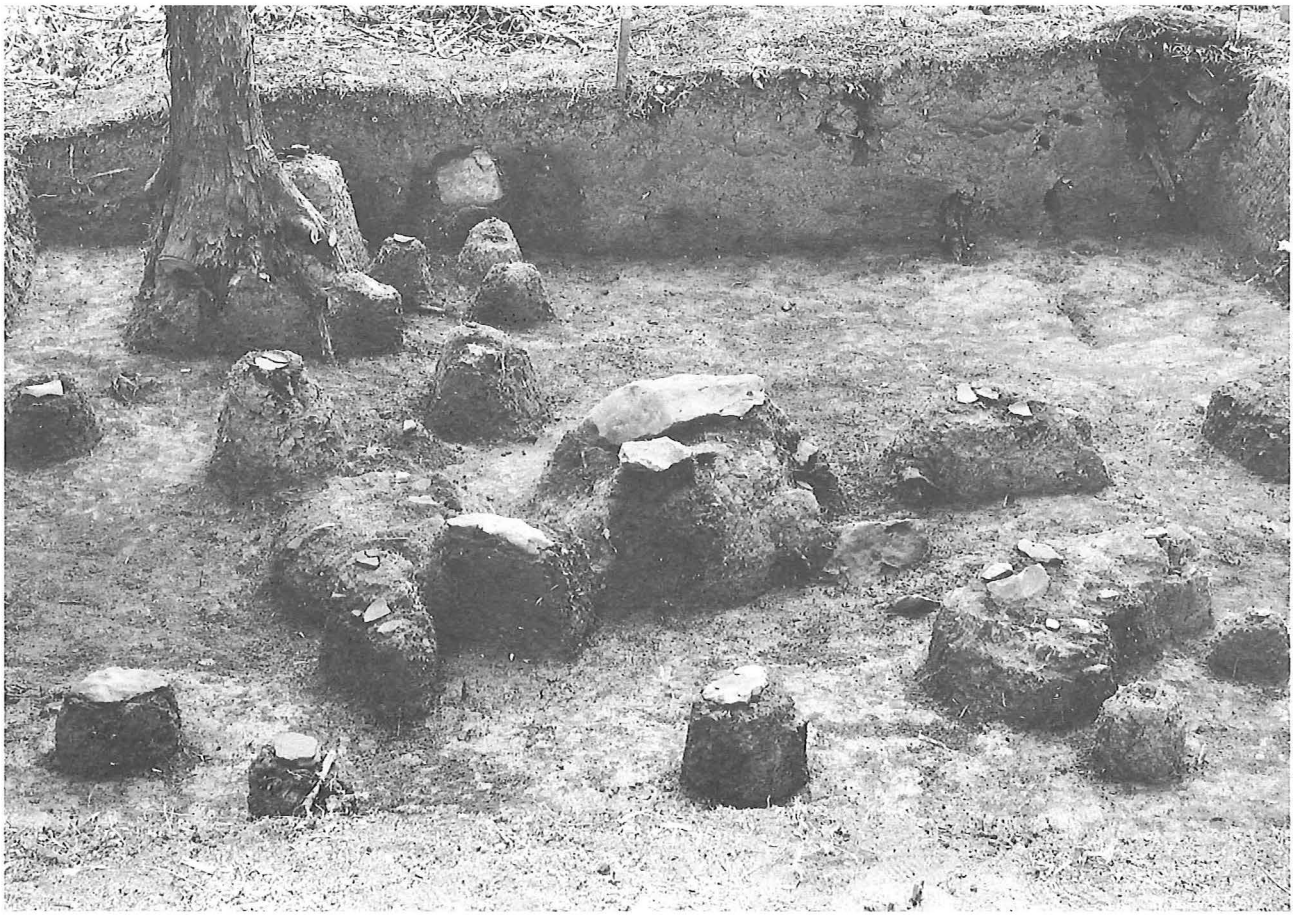
平成 6 年度土壙 1

平成 6 年度集石土壙 1

遺構出土状況

図版 6

平成 6 年度 3 ―Ａ区遺物出土状況



平成 6 年度 1 ―Ａ区遺物出土状況

遺物出土状況(1)

平成 6 年度範囲確認ＴＰ４区遺物出土状況

平成 6 年度溝 1 内出土状況

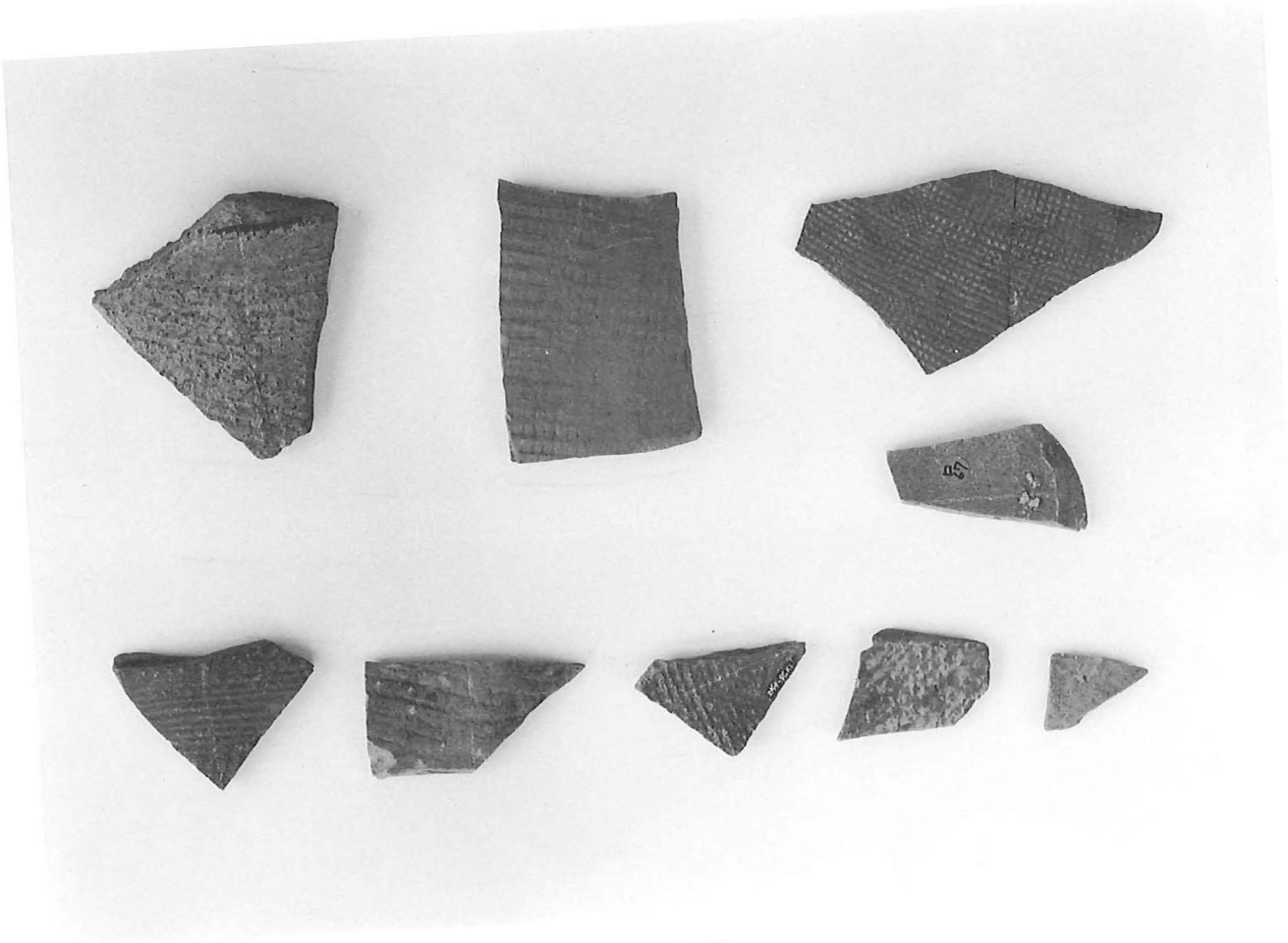
遺物出土状況(2)

図版 8

調査風景

土師質土器および輸入陶磁器

図版10



須 恵 器

報告書抄録

ふりがな	ゆりはたこふんぐん　やまのかみこふん　いきしきょかんあと
書名	百合畑古墳群・山ノ神古墳・壱岐氏居館跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	宮﨑貴夫・川口洋平・安楽勉・町田利幸
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850　長崎市江戸町2番13号　TEL 095(824)1111
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
百合畑古墳群 第1・16号墳	長崎県壱岐郡 勝本町百合畑触	42422	136 158	33度 48分 7秒	129度 42分 13秒	・1号墳 19960129～ 19960130 ・16号墳 19951204～ 19951206	56m² 20m²	道路(国道) 改良工事
山ノ神古墳	壱岐郡芦辺町 国分本村触	42423	42	33度 47分 55秒	129度 42分 55秒	19961203 ～ 19961218	51m²	道路(県道) 改良工事
壱岐氏 居館跡	壱岐郡芦辺町 国分東触	42423	64	33度 47分 44秒	129度 43分 15秒	19940614～ 19940623 19940719～ 19940819 19960722～ 19960729	67m² 229m² 60m²	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百合畑古墳群 第1・16号墳	古墳	古墳	墳丘		
山ノ神古墳	古墳	古墳		須恵器，土師器	
壱岐氏 居館跡	館跡 神社	古代 中世 近世	柱穴跡，土壙， 溝	輸入陶磁器， 土師器，須恵器， 瓦，古銭，鉄滓 近世陶磁器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第２集

百合畑古墳群・山ノ神古墳・壱岐氏居館跡

1997. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷